

「VUCAの時代」における新たな学校づくりの課題

妹尾 克利*

Challenges Confronting the Creation of a New School in the “VUCA Era”

SEO Katsutoshi

This article is an ethnographic study on the efforts of Hokusei Yoichi high school amid the coronavirus woes. Today's digital age in conjunction with the COVID-19 pandemic is correspondingly recognized as the era of volatility, uncertainty, complexity, and ambiguity (VUCA). During this time, issues confronting the educational settings are diversifying. While society is constricted by unanswered questions, the academes were compelled to review precedentism and consider a re-evaluation. This certainly is attributable to the spread of the new coronavirus which prompted lockdowns resulting to temporary closures, during which time maintaining relationship is found imperative than ensuring academic ability through remote assistance. As a result, Hokusei Yoichi's introduction of ICT progressed at a stretch and a cultivation of a culture that adapts to and embraces change has been commenced. In the VUCA era, accumulating good practices while sharing cases of failure and successes is vital given the premise of the absence of a perfect solution.

キーワード：オンライン授業，コミュニケーション，探究学習，個別最適化，集団づくり教育，GIGA スクール構想

Key Words: VUCA, SNS, AI, ICT

本稿では、筆者が勤務する高校の現場で、2020年のコロナ禍において模索してきた過程を紹介しつつ、学校の存在意義や今後の課題について論じる。

筆者が勤務する北星学園余市高等学校（以下、本校）は、北海道後志管内余市町の要請を受け、札幌のキリスト教プロテスタント主義の北星学園によって1965年に設立された。北海道は公立指向の土地柄であり、開校当時は、公立高校へ進学できなかった子どもたちの受け皿であった。しかし、入学者が減少し続け、1988年に一度廃校案が浮上したが、

* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University



図1 北星学園余市高等学校の都道府県別生徒数

高校中退者を、中退した学年から受け入れることにより、全国各地から入学希望者が集まるようになった。その後、通信制高校の増加や、加速する少子化の煽りを受け、2015年に再び廃校案が浮上した。現在も、不登校経験者や高校を中退した生徒なども含め、全国から集まった220名ほどの生徒が在籍している。本校生徒の約6割が道外出身で、全校生のおよそ8割が、町内で寮下宿生活を送っている。本校生のみを受け入れている指定下宿が町内に十数件あり、いずれも町民による民間経営である。

現代は「VUCA（ブーカ）」の時代と言われている。VUCAとは、Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性の頭文字を取った造語である。昨年、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、政府は全国の小・中学校、高等学校に臨時休校を要請した。学校は突然、休校を余儀なくされたことで、何が正解なのかもわからないまま、これまで一度も経験したことのない事態への数々の対応が求められた。これはまさしくVUCAの時代を象徴した事象と言える。

とりわけ学校は変わりにくい組織と言われるが、コロナ禍においては否応なく前例主義の見直しを迫られた。そして、オンライン授業や学習時間の確保、入学式の入場制限、検温、アルコール消毒、マスクの着用義務、換気、三密回避、など、感染防止に配慮しながら、子どもたちに学校生活を保障することの難しさを痛感した。

文部科学省の「GIGAスクール構想」により、全国の小・中学校の児童生徒1人1台端末が配備されることになった。2020年6月に追補版が出された「教育の情報化に関する手引き」では、1人1台端末環境は、もはや令和の時代における学校の「スタンダード」であり、鉛筆やノートと並ぶマストアイテムだ（文部科学省2020）と述べられている。

しかし、本校における ICT 化は遅々として進んでおらず、未だ 1 人 1 台端末環境が実現していなかった¹⁾。

従って、突然の休校要請により、授業をオンラインで行ってほしいと言われても、1ヶ月足らずの期間で全校生に端末を配備することは不可能だった。他の学校の状況を聞くと、既に導入済みの学校がある一方、多くの学校が本校と同じような状況にあった。端末を全員に確保できないと不公平になる、という理由で、オンライン授業は行わず、学習課題のプリントを郵送で配布する学校も多かったが、本校では、お互いがつながることを追求し、既存のサービスを利用しながらでも、できることをしようという結論に至った。

まず、Google フォームを使い、在校生および入学予定者の全家庭を対象とした ICT 環境調査を行った。その結果、携帯電話の普及率はほぼ 100% で、約 97% の家庭にインターネット環境があることが明らかになった。残りの約 3% の家庭のうち何軒かは、この機会に Wi-Fi を導入してくれたため、最終的には施設で生活している子どもや、事情により祖父母の家に身を寄せている子どもなどを含め、インターネット環境を確保できない家庭は 4 軒のみとなった。その 4 軒に対しては、学校で契約したポケット Wi-Fi を貸与したことで、ようやく全校生とオンライン上でつながることが可能になった。

次に、保護者との連絡の手段を SNS にシフトさせた。これまで、保護者へ向けて一斉に情報を伝える手段は郵送だったが、臨時休校期間中、政府の緊急事態宣言の如何によって、学校再開の目処も変わりうる。特に道外生は戻ってくるための航空券の手配をしなければならぬため、情勢が日々変化する状況においては、保護者への連絡は郵送ではとても追いつかない。そこで、重要な情報を迅速に発信できるよう、学校の公式 LINE アカウントを開設した。こうして、教員会議での決定事項を、タイムリーに全保護者に向けて発信することができるようになった。結果的に、書類を大量に印刷して郵送するコストも削減することができた。

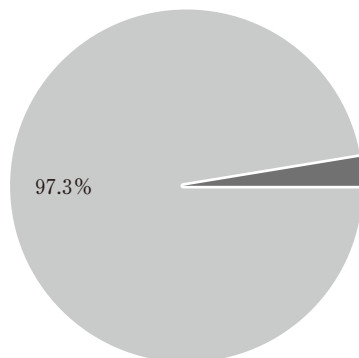


図 2 全家庭への ICT 環境調査：「自宅にインターネット環境がある」(n=219)

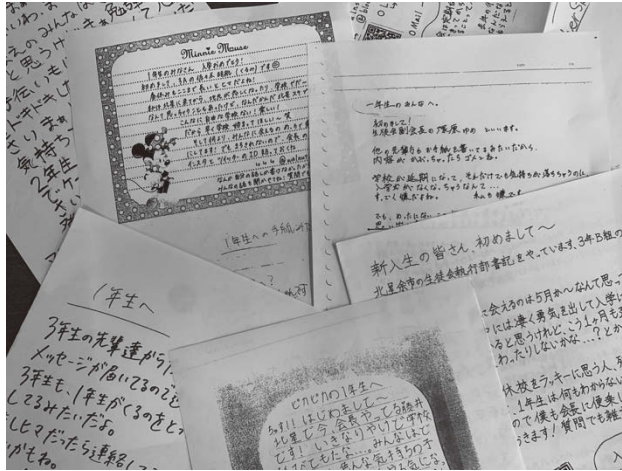


図3 在校生たちから新入生へ寄せられたメッセージ

一方、何より心配だったのは、いまだ入学式を迎えられていない新入生へのケアであった。本校への入学を希望する生徒の多くは、大学進学や就職のためというより、人との関わりの乏しさや未熟さを集団生活の中で成長させたいと願うケースがほとんどである。生活が乱れ、昼夜逆転の生活をしている子どもも多く、地元での交友関係や親子関係が深刻な状態で、一刻も早く環境を変えることが切実に求められているケースも少なくない。

そのような子どもたちに対して、いくらオンライン授業で学習内容や授業時間を確保したところで、本校の有する本質的な教育の提供にはならない。

そんな時に、頼もしかったのは、3年生を中心とした在校生たちの行動だった。彼らは、新1年生たちが、未だ学校へ通えないことに、不安な気持ちでいるに違いないと、新入生の気持ちに寄り添い、自分たちで何かできることはないかと考えた。そして学校には、新入生たちへ向けて在校生たちが書いた励ましのメッセージが、FAXや郵送で続々と送られてきたのだ。ほとんどの生徒は、メッセージの最後に自分のSNSのアカウントのIDを載せており「気軽にフォローしてね」などといった言葉で締めくくられている。

さらに、生徒会執行部によって書かれた生徒会新聞が学校に送られてきた。休校中も生徒会執行部のメンバーがグループLINEで連日会議を行い、内容を協議して最終的に書記の子がまとめたものだ。あえてワープロソフトは使わずに、手書きの質感を大切にしつつも「生徒会意見箱 Online」や執行部独自のInstagram、TwitterといったSNSのQRコードが載っており、新1年生が気軽にアクセスして、在校生とつながりやすいように配慮されている。

本校では開校以来「学級集団づくり」から「学年集団づくり」、そして「全校集団づく

HOKUSEI TIMES

2020.4.27 No.12

保護者の皆様へ

これは、生徒会執行部から**全校生**へ向けた『生徒会新聞』です!!

1年生は初めまして☺ 2,3年生はお久しぶり☺ 生徒会執行部書記の島です! 皆さん元気になつてますか? 休みが続くとだらけてしまつて課題に手が付かない僕ですが、「地元のゆるキャラを描こう」という課題だけは真、先に済ませました。これが僕の地元のゆるキャラの「あさ、パー」です。

うまいでしょ!/? かわいいでしょ!/?

...まあそんなことは置いておいて.....

中々大変な現状ですが、執行部としてできることをやっていますので、よろしく願います☺



生徒会意見箱 Online

これはその名の通り、意見箱のオンライン版です! 皆から来た質問に、僕たち執行部が回答します。

横にあるQRコードを読みとって質問してみちゃ。



「お腹空いた〜」などの独り言も大歓迎!! 完全匿名なので安心して質問してください。

QRが読みとれない! という人も、課題と一緒に学校宛に質問を送ってくれば、しっかり回答します!

回答は右で紹介するSNSとか学校のブログでできればな〜と思つてます!

SNSが... 動きます...!

僕ら執行部にはインスタグラムとツイッターがあるのですが、この休み中投稿してない! と気付いたので、どんどん投稿します! 案内はコチラ



インスタ



ツイッター

@Seitokai1stth

@Seitokai1stth

最近、#StayHomeというタグが流行りらしいので... #北星余市流StayHomeというタグをつけて執行部や先生方の家での様子を毎日投稿していきます! 暇な人は#北星余市流StayHomeをつけて家で何してるか教えて〜!

『QRコード』とか『SNS』とか... そんな感じのば、かりになっちゃってごめんね! 皆さんに直接会ってお話できるのを楽しみにしています!

図4 臨時休校期間中に生徒会執行部が発行した生徒会新聞

り」へ発展させるという、「集団づくり教育」を教育目標に掲げており、集団の中で人を育てるということを大切にしてきた。コロナ禍の混乱においても、その視点は抜けてはいけなと意識していたが、現場の教員たちは、学習時間の確保やオンライン授業の準備、さらには学校再開後の感染拡大防止策の策定に追われていたため、これほどまで心のこもったケアをする余裕が持てなかったのも事実である。その一方で、つい1ヶ月前までは2年生だった彼らが、自身もまだ、3年生としての新学期を迎えられていないにもかかわらず、最上級生としての自覚を持ち、まだ会ったことのない新入生に対してこのような激励のメッセージを寄せてくれることは、非常に頼もしく、新入生にとっても、教員からのメッセージ以上に励まされたに違いない。新入生や保護者に対して最も大切な「ケア」という点で在校生たちに大いに救われたのだ。

「集団づくり」の核となるのは学級集団である。当然授業も、学級単位で行う。単に便宜的に30数名に分けられた教室の中で、個々の生徒に対して壇上の教師が知識を教えるだけでなく、同じ空間を共有するクラスメイト同士、議論する中で、お互い補完しあいながら学びを深めていくことを目指している。しかし、オンライン授業で、そういった活動がどれほど実現可能か、まるで見当もつかなかった。

これまでビデオ会議ツールを使用した経験のある教員は一人もいなかったもので、運営委員会で、今後のオンライン授業を想定して、どのツールが一番適切かを、実際に数種類のアプリを、インストールして、試用しながら協議した。その結果、本校では比較的汎用的なビデオ会議ツールであるZoomを使用することにし、まず、教員を対象としたZoomの講習会を行った。会議や授業をオンラインで行う際には、「ホスト」の役割が非常に重要である。ブレイクアウトルームの機能を使えば、オンライン上でもグループ学習は可能ではあるが、単に無造作にグループを分けてしまうと、分けられたほうは大人でも困惑してしまう。必ず、各グループのメンバーに何らかの役割を与えるよう配慮することも重要であるということもわかってきた。今後、全教員がオンライン授業を行っていく以上、当然、全教員がホストを担えるようにならなくてはいけない。そこで、臨時休校期間中の毎朝の打ち合わせはZoomを用いてオンラインで行うことにした。本校の朝礼は、全教員が持ち回りで司会を務めることが慣例となっている。その朝礼をZoomで行い、全教員が順番にホスト役を担うことで、まずは全教員でツールの使用を日常的なものにすることを目指した。

その後、3年生の担任団が、他学年に先駆け、オンラインホームルームを開始した。通常のホームルームでは出席、遅刻、欠席などを厳密に記録するが、オンラインホームルームでは、遅刻指導云々よりも、とにかく画面越しにお互いが顔を見せあい、つながることを重視した。

3年生に続いて、1・2年生もホームルームを開始すると、特に新入生の保護者からは、学校を開始できないのはやむを得ないことだが、毎日ホームルームをしてもらえることは、子どもの生活改善につながるのととても有り難いとの声が複数寄せられるようになった。やはり、子どもたちや保護者にとっては、大量の学習課題のプリントを郵送して、それを提出させることで授業時間とカウントするよりも、たとえリモートでも、毎日決まった時間に顔をあわせ、つながることのほうが重要であるということを認識した。

オンライン授業に向けて、教員はこれまで朝礼でホスト役を経験してきたはずであるが、いざ授業が始まると、やはり手間取ってしまう教員がほとんどだった。そんな時は生徒たちが画面越しに操作方法をアドバイスしてくれることもあり、いつの間にか生徒たちのほうが既にZoomの使い方を心得ていた。

タッチパネル機能のあるノートパソコンであれば、電子ペンを使い、直接液晶画面に書き込むことができる。従って、授業テキストを画面共有すれば、一応、教室で板書をしながら解説するのと同じことがオンライン上で可能になる。タッチパネル機能がないPCでも、PDFに書き出した授業書をiPadなどのタブレットに読み込み、タブレットを画面共有すれば、電子ペンで書き込むことができる。また、ディスプレイ上部に取り付けることで、通常の液晶画面をタッチパネルに変える受信機があることもわかった。中には、OHPをPCに接続して、手元を画面共有している教員もいた。このように、これまで遅々として進まなかった校内のICT化は、一気に進み、変化を受け入れる雰囲気醸成されてきた。現在は、各教室のWi-Fi環境も整備され、次年度以降の生徒への1人1台端末の配備の計画も進められている。

こうして見様見真似で何とかオンライン授業を実施したが、にわか仕込みのオンライン授業は決して完璧とは言えなかった。教育系YouTuberが配信している動画や、NHK for Schoolが配信しているオンデマンドのコンテンツなどのほうが遥かに良くできている。いずれも無料で配信されているので、学習内容の保証という観点では、我々が時間をかけて授業動画制作に忙殺されるよりは、既存のコンテンツを見てもらったほうが良い。参考のためにいくつかのコンテンツを拝聴したが、テンポもよく、随所に飽きさせない工夫がされており、サイトからダウンロードできるテキストも充実している。YouTubeの動画を数学の勉強に使用していた生徒に感想を聞くと、通常の授業では、聞き逃した時に、その都度手をあげて授業を止めるのは気が引けるし、他のクラスメイトもいるので恥ずかしいと感じるが、動画の場合は何度でも戻って確認することができる所が良いとのことだった。また、今ではオンラインの家庭教師サービスもある。スマートフォンのカメラで、質問したい出題箇所を撮影し、画像を添付すれば、登録している家庭教師が24時間チャットや音声で対応してくれる。このサービスは、個々の生徒に対して担当の家庭教師は付か

ず、お互いの素性もわからないため、学校の先生や友達には質問しづらい初歩的な内容も気軽に質問できるようだ。このように、インターネット回線や ICT 機器の高速化によって、今日では学習者の意欲さえあれば、学校へ行かなくても学習内容の確保は十分可能であると言っていいだろう。ICT 環境の下で学習を進めていくと、学習者一人一人の学習履歴がスタディログとして蓄積され、新学習指導要領が掲げる個別最適化された学びを高いレベルで実現できるため、『脱学校』が現実的な選択肢になってくるという指摘もある²⁾。藤原 (2020) は、イヴァン・イリイチの「脱・学校論」について以下のように評価している。

学校などという不完全極まりない場にとらわれず、芸術や自然に存分に触れさせたり、優れた人たちと一緒に何かをする機会をつくったり、子どもの意思を尊重して、自由に学びをデザインしてやると、その子はのびのびと育つかも说不定い。(中略)特に核家族化が進行し、コミュニティの絆が弱くなっている現代社会において、そのような取り組みはどんどん増えていくべきである³⁾。

しかし、藤原は、イヴァン・イリイチの主張を評価した上で、様々な理由で親が教育を与えられない家庭の子どもたちにとっての、公教育の役割の重要性を主張している。危機に瀕している日本の公教育でも、「学校」が明示的、非明示的に持っている役割について改めて考えなければならない⁴⁾。

オンライン上に優良でかつ無料で配信されている教育コンテンツが数多ある中で、オンライン授業に関して全くの素人である我々が、あえてオンライン授業を行うのは、単なる学力の保証だけではなく、それ以上に生徒と教師、あるいは生徒同士が同じ時間を共有し、コミュニケーションをとることに大きな意味があると考えているからである。

「集団づくり教育」を標榜している本校においては、その大切にしている軸が変わらないのであれば、たとえ手段が変わったとしても、新しい手段に沿って、いかにしてそれを体現できるかを考えていけば良いのである。

オンライン授業が終わった後は、いつも子どもたちからまだミーティングルームを終了しないよう懇願された。そして、しばらくの間、数名の子たちがミーティングルームに残り、お互いの近況報告やゲームの話など、他愛のない会話をしながら放課後の教室のような雰囲気を醸し出していた。そんな時は、教員は生徒にホストを引き継いで、先にミーティングルームを退出する。

さらに、授業のない時間帯には「筋トレ」「クッキング」「絵しりとり」など、3年生の生徒たちが中心となり、様々なオンラインのイベントを企画した。これらの企画を行う際

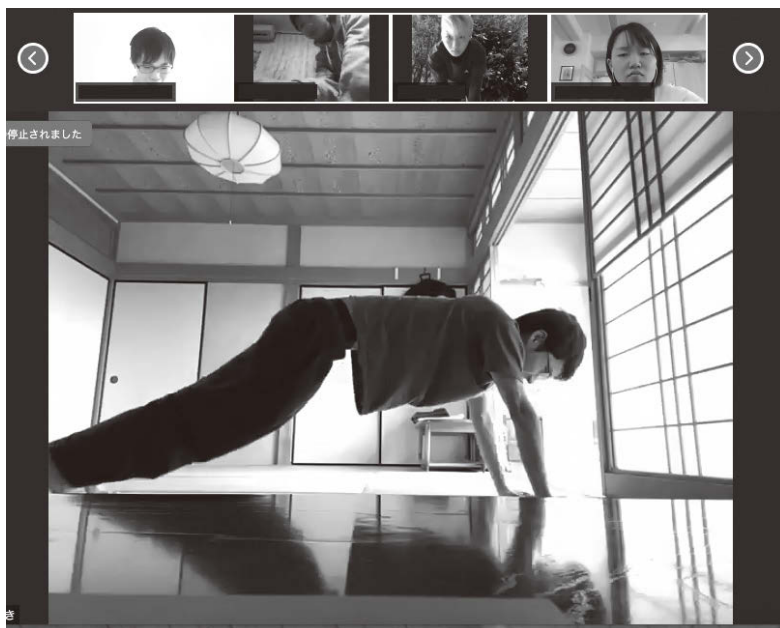


図5 オンライン・筋トレ企画



図6 オンライン・クッキング企画

には、全校生に SNS を通じて参加を呼びかけ、毎回、新1年生から3年生まで多くの参加者が集まり、大盛況であった。画面に映る参加者の顔ぶれの中には、まだ会ったことのない新1年生と思われる子たちが笑っている様子も見受けられた。ある時は、パン屋を営

んでいる保護者の一人が、自身の仕事場である厨房からライブ中継で生徒向けにパン講座を開いてくれた。このような「課外授業」は、普通の教室では決してできない、オンラインだからこそ実現可能な内容である。臨時休校中にかぎらず、なかなか教室に招くことが難しい人をオンライン上で授業に招聘するなど、今後の教育活動にも大いに活用可能であろう。

そして、6月15日、ようやく新学期を迎えることができた。新入生代表の挨拶に次のような言葉があった。

「自粛期間中もオンラインホームルームや授業をしてくれて楽しかったです。3年生のみなさんからのお手紙やSNSの活動もとってもうれしかったです。いろいろ企画してくれたおかげで学校に行けなくても北星余市の生徒になったんだと思うことができました。」(原文ママ)

学校や教師はつい授業時間や学力の保証にばかり意識が向くが、先述した通り、今日では多様な選択肢があるため、本人の意欲さえあれば、学習は一人でも可能である。

しかし、文化を創造したり、つながりから絆が生まれたり、喜びをわかちあったりということは、一人では成し得ない。また、何らかの事情で意欲や目標を見失ってしまった子どもが、環境を変え、同世代の集団の中に身を置くことで、周囲から刺激を受けて再び活路を見出せることもある。それらは、進学率や偏差値のように点数化できるものではないが、学校が学校たる所以はそこにあると、我々がこれまで現場で大切に守ってきたことである。

VUCAの時代と言われる近未来を見据えて、未来を担う若者たちが、めまぐるしく進化し続けるメディアに対して受け身の消費者としてではなく、主体的に関わり、双方向性を前提に、慎重で、倫理的で、かつ有効なコミュニケーションを発展していけるよう、どのような教育を行うのかは、公教育の役割として重要なテーマであり、教育現場に課せられた課題も大きい。

中川(2021)は、ICT教育において、ICT機器を道具の一つとして、「個別最適化」されるまでに、「教師が判断する」「子どもと判断する」「子どもが判断する」といったプロセスを行ったり来たりしながら最終的には、子ども自身が自分にとって最適なツールを選ぶ力を身につけることが理想的であると述べている⁵⁾。そして、人間の本来の感性を育み、相手の立場を尊重しつつ、心を通わせるコミュニケーション能力や、ゼロから作り上げ新たな表現を生み出す発想力や創造力、自立した個人として、周囲と協力し合いながら問題を解決していく能力を育成することの必要性はますます高まっていくであろう。

筆者は、そのことを図らずも、臨時休校期間中に、子どもたちから教えられた。教員たちが、オンライン授業に悪戦苦闘している間、いつの間にか子どもたちのほうがICTを

コミュニケーションのツールとして巧みに使いこなしており、学校に通うことができなくても、皆で楽しめるイベントを企画し、それぞれが手持ちのデバイスで、SNSを駆使してイベントの告知などの情報発信を行い、参加者を募って、新たなコミュニケーションを成立させていた。彼らの適応力には驚かされるが、それは「つながりたい」という思いそのものなのであろう。彼らもまた、本校へ入学する以前は、不登校や高校中退によって活路を見出せずにいた者も多いが、その後、本校に入学し、学校という共同体の文化の中で、多様な他者との関わりを通して、コミュニケーションやつながりの重要性を体感してきたからこそ、いつしか学校の文化を創造する側に立つようになったのだ。そして、コロナ禍の臨時休校にも振り回されず、場に応じてICTを駆使しながら、自分たちが大切だと信じるものを守ろうとしたのである。

新約聖書コリントの信徒への手紙二の中に、次のような言葉がある。

「だから、今それをやり遂げなさい。進んで実行しようと思ったとおりに、自分が持っているものでやり遂げることです。進んで行く気持があれば、持たないものではなく、持っているものにに応じて、神に受け入れられるのです。」⁶⁾この言葉は、予測不可能な現代を生きる私たちに重要な示唆を投げかけている。

人工知能（AI）やディープラーニングの実用化によって、様々な業務の自動化は今後も加速していくであろう。これまで偏差値教育で重視されてきた、暗記、計算や綴りの正確さなどは、AIが最も得意とする分野であり、正確な正解を求める能力や分析などは、も



図7 クリスマス礼拝のトーンチャイム演奏

はや AI が担っていくことになることが予想される。

教育現場に求められる課題も、センター試験の廃止をはじめとする偏差値教育からの脱却、探究学習の導入など、多様化の一途をたどっている。そして、実社会ではほとんどの場合、正解のない問題に取り組んでいかなければならない。

学校再開後は、学校祭の合唱コンクールや模擬店なども保健所の指示を仰ぎながら、様々な制約の中で敢行したが、この間、コロナ禍の対応方針を巡り、議論を重ね判断してきたことのすべてが果たして本当に正しかったのかどうか、断言することはできない。しかし、完璧な策や正解など存在しないという前提にたち、自分たちが持っているもので、とにかく失敗例も成功例もすべて共有しながら実践を積み上げていくことが今求められている。「何かあってからでは遅い」という指摘も至極当然だが、子どもたちのかけがえない青春の 1 ページを、どのように保障してあげられるのか、共に模索し、支援することが新たな学校づくりには欠かせないであろう。

注

- 1) 文部科学省 (2019)「子供たち一人ひとりに個別最適化され、創造性を育む教育 ICT 環境の実現に向けて」https://www.mext.go.jp/content/20191225-mxt_syoto01_000003278_03.pdf(2021.2.18)
- 2) 教育新聞「『脱学校』が見えてくる スタディーログの未来」2019 年 11 月 6 日
- 3) 藤原さと (2020)『『探究』する学びをつくる～社会とつながるプロジェクト型学習』平凡社 p. 229
- 4) 前掲書 p. 230
- 5) 中川一史 (2021)『学校と ICT』SKY 株式会社 p. 16
- 6) 新約聖書コリントの信徒への手紙二 8 章 11 節-12 節 p. 334